

研究、スポーツ、趣味、特技... 学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。そんなきらりと光る学生を、同じ学生の目線から紹介する。

湯川 椋也

医学部医学科4年

YUKAWA RYOYA



三俣診療班は、北アルプス最奥部の三俣蓮華岳（標高約2500m）の診療所にて、登山者の健康と安全を守る診療活動を行うボランティア団体。現在、岡山大学、香川大学の学生とそのOBである医師、看護師が主に活動を行う。診療所は昭和39年に岡山大学医学部により三俣山荘に併設され、現在に至るまで毎夏活動を行っている。診療所開設期間は7月下旬から8月下旬頃の約30日間。現在、診療班は全7班で構成され、そのうち4班が岡山大学、3班を香川大学が担当。開設中の診療所には基本的に毎日、医師1人、看護師1人、学生3〜5人が常駐し、主に捻挫のケア、疲労、高山病などの診療を行っている。今夏にはTBS系列で放送されたドラマ「サマーレスキュー」天空の診療所」のモデルとなり大きな注目を集めた。

現在、三俣診療班には、1〜6年生の岡山大学約20人が所属。診療所開設シーズン以外にもミーティングや勉強会を行い新入部員向けに大山で登山の練習を実施するなど、準備を怠らず夏の診療に備えている。

夏山で診療活動従事ボランティア団体「三俣診療班」



▲診療室の一角で医療器具を消毒

「山に診療所があるということ、登山者にとって、ひとつの安心になるのではないかと話すのは、「三俣診療班」岡山大学学生代表の湯川椋也さん（医学部医学科4年）。湯川さんには、登山者のけがや病気を治す手助けをしたい、という強い思いがある。

「医学部に入ったのだから、それに関係した活動がしたい」と思っていた湯川さん。三俣診療班で活動していた先輩から「大学にいてだけではできない、多くの特殊な体験ができる」と聞いて興味をわき、2年生で入部。登山経験はなかったが、先輩から山の上の景色の素晴らしさを聞き、実際に登ってみたいと思ったことも大きききっかけとなった。

初めての三俣蓮華岳登山。「いろいろな前知識を持って登ったが、実際に登ると何から何まで新

登山者支える山岳診療

先輩医師から経験学べ



▲山荘の方々と一緒に夕食

鮮だった」と湯川さん。遥か遠くまで見渡せる景色に「山ってこんなにいい所なんだ」と強い印象を受けたという。一方で、初めての診療班活動では何をすればよいかわからず、自分の至らなさも痛感したという。

診療班の学生は医師に薬や医療機器を渡したり、器具を消毒するなど補助業務を行う。湯川さんは今夏、

る器具が限られるという点で大きく異なる。湯川さんは「将来は山小屋のような特殊環境でも、普段通りの診療ができるような医師になりたい」と話す。

診療班経験を重ねるごとに、登山や山の魅力も強く実感。「山は自由なことが多いイメージがあるが、実際にいくと意外と気にならないし、何より山でしか味わえない雰囲気や景色がある。気負わず、多くの人に登山に挑戦してほしい」と語る。入部3年目となり「山に連れて行ってもらう立場から、先輩たちを連れて行く立場」となった湯川さん。「今後は、自分たちの経験を先輩たちにたくさん伝えていきたい。多くの先輩たちにぜひ診療班活動に参加してほしい」と熱く語る。

最終班で約4日間活動。診療ができない分、学生たちは患者さんと積極的に会話して、症状などを話しやすい雰囲気にするなどを大切にしているという。診療班の医師は学生時代から活動に関わっている人が多く、登山経験や山での診療の特徴について教わることも多い。「生の診療現場を間近で見ることができると、非常に良い経験。将来医師になった時、ここで見たものを活かせたら」と話す湯川さん。山岳診療は、診療自体は一般の診療と特別変わらないが、使え



インタビュー
岡山大学学生広報スタッフ
文学部人文学科1年
鹿森 沙恵香